

小論文

I. 注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子は開いてはいけません。
2. 試験開始後、頁の落丁・乱丁および印刷不鮮明、また解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
3. 試験終了後、解答用紙を回収します。
4. この課題は持ち帰ることができます。ただし、試験終了後、監督者の指示があるまでかばんの中等にしまうことはできません。
5. 監督者の指示に従い、解答用紙の「受験番号」・「氏名」欄に正しく記入してください。

II. 下記の文章を読み解答してください。

1. 試験時間 : 60分
2. 課題 : 日本語の課題1題
3. 解答の仕方 : 解答用紙に記入してください。

下記の文中の「存在と演技が厳密には区別できないだろう」(下線部)とはどういうことでしょうか。また、それに対してあなたはどのように考えますか。まず、「存在」と「演技」とはそれぞれどういう意味で、両者が「厳密には区別できないだろう」とはどういうことなのかをわかりやすく説明しなさい。そのうえで、あなた自身の経験をあげながら、それに対するあなたの意見を述べなさい。(600字以内)

制服というのは、ひとの存在をある(社会的な)＜属性＞に還元してしまうものです。そうすることで、ひとは特定の個人として現われなくてもすみます。ここから制服としての衣服のいくつかの興味深い特徴が見えてきます。

警察やガードマンや車掌など、市民の安全にかかわる公的な職業につく場合や、スポーツの競技をおこなう場合など、とりわけて精神の緊張や集中が必要なとき、わたしたちは制服で身を包みます。一つの役割にじぶんの存在を還元するためです。

ひとは隠れるためにも制服に身を包みます。ひとはじぶんを目立たせ、奮^{ふる}い立たせたいときもありますが、逆にできるだけ目立たないでひっそりと時間を過ごしたいときもあります。そういうとき、サラリーマンらしさ、OLらしさそのものと言えるような服を着ることで、ひとはその固有性を消して、そういう「らしさ」の制服のなかに隠れることができます。

これらが制服の表の顔だとしたら、制服にはもう一つ、裏の顔というべきものもあります。「らしさ」の制服を着ることで身を偽ることができます。偽装がそうです。それをゲームとしてやれば、コスチューム・プレイということになるのでしょうか。もう少し、人格としてのじぶんの同一性を揺さぶってみたい、ぶれさせてみたいというときには、ひとはじぶんのアイデンティティの根幹にかかわるところでコスチューム・プレイをします。その典型が異性装でしょう。

はじめのところで、バルト^(注)がファッションは「<わたし>とはだれか？」と戯れていると言ったのは、そういう意味です。ひとは服を着ることによって「だれ」かになるわけですが、逆に服を着ることでその「だれ」を揺さぶったり、他人にたいして偽ったりすることもできます。ときにはじぶんのかげがえのない存在を賭け、ときにはそのイメージと戯れます。あるいはイメージを演じます。ちなみに「賭け」も「戯れ」も「演技」も、フランス語では「ジュー」(jeu)という同じ語で表現します。ドイツ語でも「シュピール」(Spiel)と、同じように表現します。このことは、わたしたちの人生において、存在と演技が厳密には区別できないだろうことを暗示しています。

(鷲田清一『ひとはなぜ服を着るのか』筑摩書房より一部改変)

(注)バルトとは、フランスの哲学者であり批評家でもあるロラン・バルト(Roland Barthes 1915-1980)のこと。